Tsukuba Psychological Research
2008, **36**, 1-9

CMCが脱抑制的行動および自己意識に及ぼす効果[1)]

筑波大学大学院人間総合科学研究科　佐藤　広英

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系　吉田富二雄

The effects of computer-mediated communication on uninhibited behavior and self-awareness

Hirotsune Sato and Fujio Yoshida (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The effects of computer-mediated communication (CMC) on uninhibited behavior, private self-awareness and public self-awareness are investigated. It is hypothesized that CMC heightens private self-awareness and reduces public self-awareness in participants, and, thus, increases uninhibited behavior compared to face-to-face (FTF) situations. Female undergraduate students (n=60) participated in the experiment. Three-member groups interacted in constructing a story based on one Thematic Apperception Test (TAT) picture under either CMC or FTF conditions. Content analysis, other's ratings and self-reports were used to measure uninhibited behavior. The results indicate that participants were more aggressive and acted less as themselves in the CMC condition than in the FTF condition. Moreover, CMC heightened private self-awareness in the participants, which led to increased verbal aggression.

Key words: computer-mediated communication, uninhibited behavior, private self-awareness, public self-awareness.

問題と目的

従来，コンピュータを介したコミュニケーション（computer-mediated communication：以下，CMCと略記）では，匿名的状況であるために抑制が外れやすく，対面場面（face to face：以下，FTFと略記）よりも脱抑制的行動（uninhibited behavior）が生起しやすいと考えられ（e.g., Hiltz & Turoff, 1978），これを検証するために多くの研究が行われてきた。特に，CMCでは攻撃的な言動が生起しやすいことが，多くの研究において報告されている（e.g., Kiesler, Zubrow, Moses, & Geller, 1985; Siegel, Dubrovsky, Kiesler, & McGuire, 1986）。例えばSiegel et. al. (1986)は，CMCとFTFにおける攻撃的言動の差異について，選択的ジレンマ課題（Choice Dilemma Questionaire: Kogan & Wallach, 1964）を用いた実験を行った。会話記録の内容分析を行った結果，CMCでは他のメンバーに対する“罵り”や“侮辱”などの攻撃的言動が生起するのに対し，FTFではそれらの発言は一つもみられなかった。また，脱抑制的行動の別の側面として，CMCでは，攻撃的言動といったネガティブな行動だけではなく，“普段は言えないような自己の内面を表出できる”という観点から，自己開示が生起しやすいことも報告されている（e.g., Coleman, Paternite, & Sherman, 1999; Kiesler et al., 1985; Joinson, 2001）。例えば，Joinson (2001)は，ジレンマ状況に関する討議課題を用い，CMC条件と

1）本研究は，文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)（課題番号18530476　代表：吉田富二雄）の助成を得て実施された一連の研究の一つである。また，本論文の一部は日本心理学会第69回大会において発表された。

FTF条件における自己開示量を比較した。会話記録の内容分析により自己開示（自分の情報を含む発言）の数を計数した結果，全体として数は少ないものの，FTF条件よりもCMC条件において有意に多くの自己開示がみられた。

このようにCMCにおいて脱抑制的行動が促進されることを示す研究は多くみられるが，実際には，各研究においてみられる脱抑制的行動の絶対数は非常に少ない（Lea, O'Shea, Fung, & Spears, 1992）。そのため，Lea et al.（1992）においても指摘されるように，これまでの研究ではCMCとFTFにおける脱抑制的行動の差を明確な形で示しているとは言い切れない。その原因として測定方法の問題が考えられる。従来の研究をみると，会話記録の内容分析から脱抑制的行動を測定する手法が多く用いられている。例えば，Kiesler et al.（1985）は，脱抑制的行動を“無礼な発言，悪態，悪口やからかい，わめき，個人的な感情の表現，誇張表現の利用”として定義し，選択的ジレンマ課題中のそれらの数を計数している。しかし，課題中に生起する脱抑制的行動の数が少ないことを考えると，内容分析による測定では脱抑制的行動を十分に捉えきることができないと考えられる。さらに，内容分析による測定では，脱抑制的な発言の数のみに焦点をおいているため，その発言を行う会話の文脈や参加者自身の意識を考慮することができないという問題も指摘される（O'Sullivan & Flanagin, 2003）。例えば，皮肉的な言動は，同じ言葉であっても，文脈によって親和的な冗談とも意図的な攻撃とも解釈されるだろう。脱抑制的行動を行う文脈や参加者自身の意識を考慮するための方法として，第三者が会話全体を読み，会話の雰囲気や流れを含めた上で参加者の脱抑制的行動を客観的に評価する方法（他者評定）や，参加者自身が会話の内容を振り返り，自分自身の脱抑制的行動を評価する方法（自己報告）が考えられる。内容分析による指標だけでなく，他者評定や自己報告による指標を同時に用いることによって，脱抑制的行動をより多角的に捉えることができ，また，測定の幅を広げることによって，CMCとFTFの差をより明確な形で示すことができると考えられる。

また，これまで，CMCが脱抑制的行動を促進することを説明するモデルや理論が提唱されている。匿名状況における脱抑制的行動については，没個性化理論（Zimbardo, 1969）に基づいた議論が行われている。匿名状態は人を没個性化状態へと導き，個人としての感覚，つまり自己意識（self-awareness）を低下，喪失させ，それが攻撃行動や反社会的行動へとつながると説明されている。同様に，CMCに関するSproull & Kiesler（1986）の社会的文脈手がかり減少モデル（Reduced Social Cues model）においても，没個性化の観点が用いられている。このモデルによると，CMCにおける匿名性は，互いの非言語情報や外的な環境情報などの社会的手がかりを排除してしまうため，没個性的な状態へと導く。そして，没個性化することにより，自己意識は低下し，その結果，攻撃的言動などの脱抑制的行動が促進されると説明される。一方，Joinson（2001）は，CMCにおける自己開示について，没個性化の概念を用いずに，自己意識の観点から説明を行っている。Matheson & Zanna（1988）によると，CMCではFTFに比べて単純に自己意識が低下するという訳ではなく，自己意識を私的と公的の二側面に分類するとき，公的自己意識は低下するが私的自己意識は高まるとされる。Joinson（2001）はこの結果を基に，CMCにおける公的自己意識の減少が，評価懸念や自己呈示への関心を低下させ，また私的自己意識の増加が自己内省的な状態を導くことによって，自己開示が促進されると説明している[2)]。

以上のように，上記のモデルは自己意識の観点から説明を行っているが，CMCにおける自己意識の変化を他の研究結果から引用しているため，自己意識や脱抑制的行動を変数として測定し，それらの関連性を直接的に分析してはいない。そのため，CMCにおける自己意識の変化と脱抑制的行動の関連性については，明確な形で示されていない。また，これまでCMCにおける自己意識を直接測定した研究はほとんどみられず，匿名性の観点から自己意識の変化を推測するに留まっている。唯一，Matheson & Zanna（1988）において自己意識は測定されており，CMCではFTFに比べて，参加者の私的自己意識が有意に高く，公的自己意識が低い傾向を示すことを示している。しかしながら，この研究において用いられた私的自己意識，公的自己意識の尺度はそれぞれ2項目ずつだけであり，さらに，私的自己意識の項目間相関も有意ではなかった。したがって，この自己意識の尺度は，信頼性が低く，CMCにおける自己意識の変化を正確に捉えられていない可能性が考えられる。CMCにおける自己意識の変化をより正確に捉えるためには，自己意識の尺度を吟味した上で検討する必要があると考えられる。Matheson & Zanna（1988）とJoinson（2001）

2）対面状況における自己開示の研究においても，私的自己意識の増加と自己開示の関連性（Franzoi & Davis, 1985），および公的自己意識の低下と自己開示の関連性（Crowne & Marlowe, 1960）は報告されている。

に基づくと，次のような結果が予測できる。CMCは匿名で自己の情報が知られないため，他者の目を気にすることがなく（公的自己意識の低下），さらに他者の情報が分からないため，他者の注意が向きにくく，その分，自分の意見や考えへの注意（私的自己意識）が高まると考えられる。また，CMCは文字によるコミュニケーションであり，自分の意見や考えを文字で表現する必要がある。そのため，自分の意見や考えをより強く意識しやすいと考えられる。私的自己意識の高まりは自己内省的な状態や自己の信念や態度と一貫した行動を導くため（Carver, 1975），ディスカッションを行う場面ではより主張的，攻撃的となると考えられる。そして，社会的文脈手がかり欠如モデルに従うと，公的自己意識の低下は没個性的な状態であるため，脱抑制的な行動が促進されると予想される。

以上の問題を踏まえ，本研究では，CMCにおける脱抑制的行動について検討を行った。その際，自己開示や攻撃性などの脱抑制的行動について，会話記録の内容分析による行動指標，第三者が会話記録を読んで評定を行う他者評定，質問紙による自己報告の三側面から多角的に測定を行った。そして，私的自己意識，公的自己意識の尺度を修正した上で，従来の研究において指摘される脱抑制的行動と自己意識の関連性を直接的に検討した。また，CMCにおける脱抑制的行動を扱った多くの研究では，実験課題として選択的ジレンマ課題が用いられている。この実験課題は，“何％成功する可能性があれば，その行動を他人に勧めるか”をアドバイスする場面であり，そして，メンバー間で一つの結論を導くよう話し合いを行う共同作業場面である。しかし，この課題は自分自身と関係がない課題であり，自己開示が行われにくく，測定が困難であると考えられる。そこで，本研究では，自己開示が行われやすいと思われる物語作成課題（TATの図版（Murray, 1943）に現れる登場人物に自己を投影しながら，3名で話し合って一つの物語を作成する課題）を用いて検討を行った。以上の議論に基づき，本研究では以下の三つの仮説について検討を行った。

仮説1　CMCでは，FTFに比べて，自己開示や攻撃的言動などの脱抑制的行動が多くみられるだろう。

仮説2　CMCでは，FTFに比べて，参加者の私的自己意識が高く，公的自己意識が低いだろう。

仮説3　CMCにおける私的自己意識の高まりや公的自己意識の低下が脱抑制的行動を促進するだろう。

方　法

実験計画

コミュニケーション様式（CMC条件，FTF条件）を要因とする1要因実験参加者間計画であった。

実験参加者

女子大学生60名を対象とし，互いに未知の3名を1グループとし，計20グループ作成した。そして，各条件に10グループずつ，無作為に配置した。

コミュニケーション様式

以下のコミュニケーション様式2条件のどちらかにおいて，参加者3名による話し合いを行った。

CMC条件　実験室は，天井から下まで届くアコーディオンカーテンにより完全に四つの空間に区切られており，そのうち三つの空間に参加者3名は配置された。各空間の広さは3.2m×3.6mであり，壁際に机が置かれ，3名はそれぞれ机の前に座り，互いに名前も顔も全くわからない匿名状態で，チャットを介して話し合いを行った。チャットには，“みんなのチャット♪”というフリーソフトを用い，相互に接続された4台（参加者用3台，実験者用1台）のコンピュータそれぞれにインストールして用いた。なお，参加者には，“Aさん”，“Bさん”，“Cさん”という仮名が与えられており，チャット中の発言と共に表示された。

FTF条件　参加者3名は，大きなテーブルを囲む形で座り，互いの顔や様子，名札により名前が分かる状態で話し合いを行った。また，テーブル中央にICレコーダを置き，会話を録音した。

実験課題

投影法の心理テストであるTATの図版（Murray, 1943）を元に，3名でディスカッションを行い，協力して一つの物語を作るという物語作成課題を行った。なお，図版には，自己を投影しやすいよう女性が登場人物として登場し，第三者により物語が作りやすいと判断されたTAT図版番号2を用いた。

手続き

参加者が入室後，以下の教示を行った。“本実験は，メディアが相互作用に及ぼす影響を見るためのものです。これから皆さんには，ある絵を元に，皆で相談をしながら物語を作っていただきます。絵の中の登場人物は，過去にどのようなことがあって，今ここで何をしていて，これからどうなるのか，ということについて，物語を作成してください。その際，自分自身を絵の中の登場人物によく置き換えて，自分が絵の中の登場人物であったらどうするかを考えながら物語を作ってください。なお，時間制限はございませんが，30分経過しましたら声をかけ

ます。また話し合いの内容は記録させていただきます"。

そしてCMC条件のみチャットの利用方法の簡単な説明と練習を行った後，各条件で話し合いを開始した。なお，話し合いの時間は，CMC条件で平均33.91分（$SD=1.42$），FTF条件で平均19.67分（$SD=9.53$）であった。終了後，記録用紙に作成した物語の記入を求めた。その後，質問紙への回答を求め，最後にデブリーフィングを行い，実験を終了した。

従属変数

話し合い中の脱抑制的行動（自己開示，攻撃的言動）について，行動指標，他者評定，自己報告の三側面から測定を行った。また，私的自己意識，公的自己意識に関しては，質問紙による自己報告により測定を行った。

行動指標　第一著者及び女子大学生1名が，会話記録の内容分析を行った。まず，自己開示行動の指標として，Joinson（2001）の定義に基づき，"自分の情報を開示する発言のうち，質問の答えでない自発的なもの，前後の文脈に影響を受けていないもの（例：実は自分妄想大好きなんです）"の数を発言単位で計数した。また，攻撃的言動の指標として，"他の参加者の意見に対する反論[3]や直接的な言語的攻撃（例：それはおかしいんじゃない？）"の数を発言単位で計数をした。なお，2名の間で判定が異なる場合は話し合いにより解決した。

他者評定[4]　女子大学院生1名，女子大学生1名の計2名が，CMC条件のテキスト記録とFTF条件の音声記録をテキストに書き起こしたものを読んで評定を行った。評定では，各参加者の発言が，どの程度内面的であるかについて2項目（"本音で話している"，"感情を素直に表している"），での程度攻撃的であるかについて2項目（"他のメンバーの意見に対して反論している"，"率直に意見を述べている"）をそれぞれ7件法により評定を求めた。

自己報告　自己開示については，吉田・安念・遠藤（1998）を参考に，課題中にどの程度心を開いて話をしていたかに関する内面開示3項目（"心を開いて話ができた"，"内面的な部分を表出できた"，"自分を表現するのに抵抗感を感じていた（逆転）"），課題中にどの程度自己を演出していたかに関する3項目[5]（"別の自分を演出していた"，"知らず知らずに演出していた"，"望ましい自分を演じていた"）を作成した。また，攻撃的言動については，独自に3項目（"会話の中にグループの誰かに対する誹謗中傷が含まれていた"，"会話の中に感情的な発言が多くみられた"，"他のメンバーを傷つけることを言ってしまった"）を作成した。それぞれ，"1．全く当てはまらない－7．非常に当てはまる"の7件法で回答を求めた。

自己意識　私的自己意識，公的自己意識については，Buss（1980），菅原（1984）の自意識尺度を参考に，状態として測定可能な項目を選定し，表現を修正し，それぞれ5項目ずつ独自に作成した。それぞれについて，"1．全く当てはまらない－7．非常に当てはまる"の7件法で回答を求めた。具体的な項目はTable 2に示した。

結　果

行動指標

(a) 自己開示の数，(b) 攻撃的言動の数をそれぞれ各個人の発言数で割り，自己開示や攻撃的言動が会話中に含まれる割合を算出した。条件ごとの平均値をFig. 1に示した。各指標について角変換を行ったのち，コミュニケーション様式を要因とする1要因分散分析を行った。その結果，(a) 自己開示数については，条件間に有意差はみられなかった（$F(1,57)=.49$, *n.s.*）。一方，(b) 攻撃的言動の数については，CMC条件においてFTF条件よりも攻撃的言動が有意に多くみられた（$F(1,57)=42.96$, $p<.001$）。

他者評定

評定者ごとに自己開示2項目，攻撃的言動2項目

3）他の参加者の意見に対する反論は，自由な意見の表出であって，攻撃性を示す言動ではないという考え方もできるが，例えば特性的な攻撃性を測定する尺度である日本語版Buss-Perry攻撃性質問紙（安藤・曽我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井，1999）では，言語的攻撃性の指標として，"相手の意見への反論や対立"に関わる項目が用いられている。すなわち，反論といった指標は，相手に対する直接的な攻撃ではないものの，より広い意味での攻撃性の指標として利用しうるものと考えられる。

4）音声記録における非言語情報が評定結果に影響を及ぼす可能性，そして音声記録では3名の声の判別が難しく，それぞれに対する評定が困難であることを踏まえ，本研究では音声記録をテキストに書き起こしたものを評定に用いた。

5）Bargh, McKenna, & Fitzsimons（2002）は，FTFの相互作用と比べて，CMCでは本当の自分（true self）を表出しやすいと指摘している。すなわち，CMCではFTFよりも自己を演出する程度が低いと考えられたため，本研究では，内面的な自己開示と共に自己演出についても測定を行った。

の平均値を算出し，2名の平均値をもって，(a) 自己開示（他者評定）得点（$\alpha = .91$，評定者間相関：$r = .43$，$p < .01$），(b) 攻撃的言動（他者評定）得点（$\alpha = .58$，評定者間相関：$r = .38$，$p < .01$），とした。条件ごとの平均値をFig. 2に示した。各指標について，コミュニケーション様式を要因とする1要因分散分析を行った。その結果，(a) 自己開示（他者評定）得点については，条件間に有意差はみられなかった（$F(1, 57) = .37$，*n.s.*）。(b) 攻撃的言動（他者評定）得点については，CMC条件においてFTF条件よりも発言がやや攻撃的であると評定されていた（$F(1, 23) = 3.99$，$p < .10$）。

自己報告

内面の開示に関する3項目，自己の演出に関する3項目，攻撃的言動に関する3項目については，各項目の平均値をもって (a) 内面開示得点（$\alpha = .60$），(b) 自己演出得点（$\alpha = .81$），(c) 攻撃的言動得点（$\alpha = .56$）とした。条件ごとの平均値をFig. 3に示した。各得点を指標とし，コミュニケーション様式を要因とする1要因分散分析を行った。その結果，(a) 内面開示得点については条件間に有意差はみられなかった（$F(1, 57) = .96$，*n.s.*）。(b) 自己演出得点については，CMC条件においてFTF条件よりも有意に得点が低かった（$F(1, 56) = 12.18$，$p < .01$）。(c) 攻撃的言動得点については，条件間に有意差はみられなかった（$F(1, 56) = 2.69$，*n.s.*）。

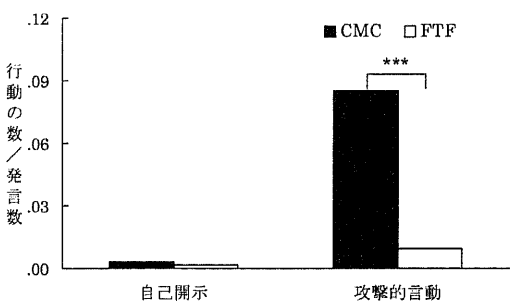


Fig. 1　行動指標の平均値　$^{***}p < .001$

脱抑制的行動測度間の関連性

脱抑制的行動の測度間（行動指標，他者評定，自己報告）の相関係数を算出した（Table 1）。その結果，攻撃的言動では，行動指標と他者評定の間に有意な正の相関がみられた。しかし，その他では有意な相関はみられなかった。

自己意識

私的自己意識，公的自己意識に関する各5項目については，最初に主成分分析により一次元性の確認を行った。その結果，どちらの尺度においても第一主成分に対する負荷量の絶対値は高い値を示していた。なお，私的自己意識，公的自己意識の項目ごとの主成分負荷量と平均値をTable 2に示した。そこで，各項目の平均値を算出し，(a) 私的自己意識得点（$\alpha = .76$），(b) 公的自己意識得点（$\alpha = .87$）とした。条件ごとの平均値をFig. 4に示した。各得点を指標とし，コミュニケーション様式を要因とする1要因分散分析を行った。その結果，(a) 私的自己意識得点については，CMC条件においてFTF条件よりも有意に得点が高かった（$F(1, 57) = 6.13$，$p < .05$）。(b) 公的自己意識得点については，条件間に有意差はみられず（$F(1, 57) = .58$，*n.s.*），平均値も仮説とは逆の方向を示した。

パス解析

CMCにおける私的自己意識の高まりや公的自己意識の低下が脱抑制的行動を促進するという予測を検討するため，パス解析を行った。パス解析は，第1水準を実験条件（コミュニケーション様式），第2水準を私的自己意識と公的自己意識，第3水準を行動指標，他者評定，自己報告による脱抑制的行動とする流れを想定し，各水準より上位にある変数を説明変数とする重回帰分析（強制投入法）を繰り返し行う方法を用いた。なお，第1水準である実験条

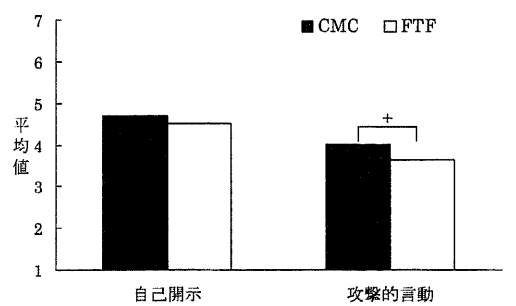


Fig. 2　他者評定の平均値　$^{+}p < .10$

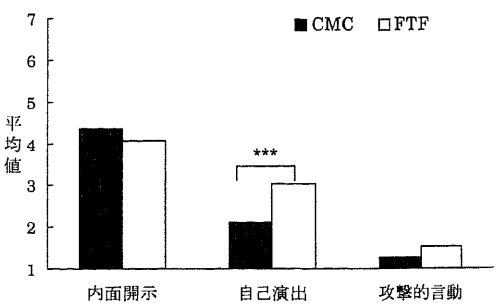


Fig. 3　自己報告の平均値　$^{***}p < .001$

Table 1　脱抑制的行動測度間の相関係数

自己開示	他者評定	内面開示（自己報告）	自己演出（自己報告）
行動指標	.06	.09	.10
他者評定		.18	−.02
内面開示（自己報告）			−.21
攻撃的言動	他者評定	自己報告	
行動指標	.43**	−.21	
他者評定		.00	

$^{**}p < .01$.

Table 2　私的自己意識，公的自己意識尺度の主成分負荷量と平均値

私的自己意識項目（$\alpha = .76$）	負荷量	*Mean*
1．自分自身の感情に注意を向けていた	.79	3.76
2．あまり自分について意識していなかった（R）	−.72	3.92
3．自分の考えについて注意を向けていた	.64	5.07
4．自分の気持ちの変化を感じていた	.70	4.41
5．自分の心の動きに気を配っていた	.71	3.76
負荷量の二乗和	2.55	
寄与率	51.05	
公的自己意識項目（$\alpha = .87$）	負荷量	*Mean*
1．自分が相手にどう思われているのか気になった	.84	4.29
2．自分の発言を相手がどう受け取ったか気になった	.81	5.12
3．相手からの評価を考えながら振舞っていた	.82	4.03
4．自分を良く見せようと気をつけていた	.80	3.12
5．相手の目をまったく気にしていなかった（R）	−.79	3.14
負荷量の二乗和	3.32	
寄与率	66.39	

注）（R）は逆転項目

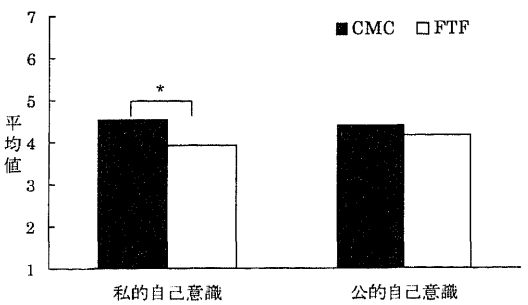


Fig. 4　私的自己意識，公的自己意識の平均値
$^{*}p < .05$

件はダミー変数化（CMC条件を1，FTF条件を0）したものを分析に用いた。また，脱抑制的行動の行動指標は，角変換後の値を分析に用いた。分析は，第1段階として，第1水準の変数から第2水準の変数への重回帰分析を行い，第2段階として，第1，第2水準の変数から第3水準への重回帰分析を行った。自己開示に関する分析結果をFig. 5，攻撃的言動に関する分析結果をFig. 6に示した。その結果，自己開示に関しては，条件から自己演出に対する強い直接効果がみられたが，予測していた自己意識による媒介過程はみられなかった。一方，攻撃的言動に関しては，CMCが私的自己意識を高め，その結果，行動指標の攻撃的言動が促進されるという流れが示された。また，条件から行動指標の攻撃的言動に対する強い直接効果もみられ，CMC自体が攻撃的言動を促進していた。

考　察

本研究では，CMCにおける脱抑制的行動について，自己意識との関連性を含めて検討を行った。その結果，当初設定した仮説は，部分的に支持され

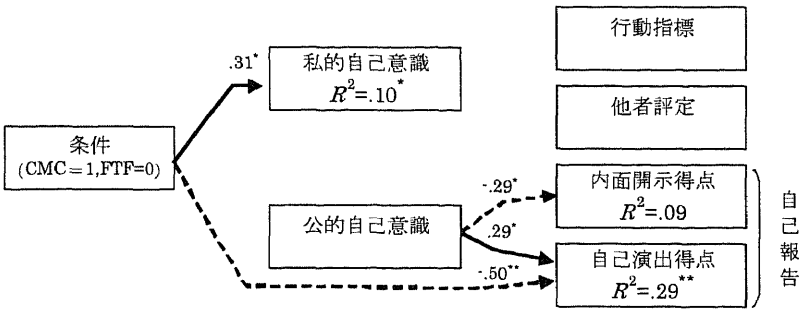


Fig. 5　自己開示に関するパス解析の結果。矢印付近の数値は標準偏回帰係数。実線は正のパスを，点線は負のパスを示す。$^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$

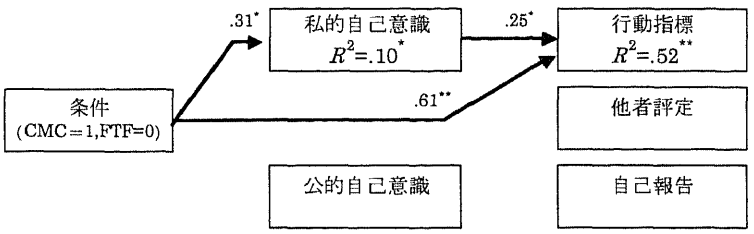


Fig. 6　攻撃的言動に関するパス解析の結果。矢印付近の数値は標準偏回帰係数。$^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$

た。すなわち，CMC では FTF に比べて，行動指標の攻撃的言動が多くみられ（Fig. 1），自己報告における自己演出の程度が低かった（Fig. 3）。また，自己意識の尺度を修正した上で CMC と FTF における自己意識の差異を検討した結果，CMC では FTF に比べて，参加者の私的自己意識の程度が高いことが示された（Fig. 4）。また，パス解析の結果，CMC が参加者の私的自己意識を高め，その結果，行動指標の攻撃的言動が増加するという媒介過程が確認された（Fig. 6）。一方，公的自己意識に関しては，仮説とは異なり，条件間に有意な差はみられず，脱抑制的行動との関連性も確認されなかった。以上の結果から，本研究は CMC が脱抑制的行動を促進することを明確な形で示し，さらに，自己意識と脱抑制的行動との関連性についても直接的に検証することができたと言えるだろう。以下の考察では，仮説が支持されなかった理由を含め，まず CMC における脱抑制的行動について，続いて自己意識との関連性ついて，それぞれ論議する。

CMC における脱抑制的行動

本研究では，CMC と FTF における脱抑制的行動について，従来の研究で用いられる内容分析だけでなく，他者評定，自己報告を含めた三側面から測定を行った。自己開示に関しては，自己報告における自己演出においてのみ条件間に有意差がみられ，FTF よりも CMC において，参加者の自己演出の程度は低かった。一般的に，初対面の人物と相互作用を行う場合，相手に悪い印象を抱かれないように意図的に振る舞うだろう。しかし，CMC では，相手が匿名であるため，FTF に比べて自己を演出しようとする動機が低く，その結果，演出のない本当の自己（true self）が表出できるのではないかと考えられる（Bargh et al., 2002）。一方，行動指標および他者評定では，条件間に有意な差はみられなかった。これは，実験中にみられた自己開示の数が非常に少なく，床効果を示していたことが原因であると考えられる。では，何故自己開示の数は少なかったのだろうか。この理由として，実験設定の問題が挙げられる。本研究で用いた物語作成課題は，投影法の課題であり，自己を物語の中に投影していくものである。そのため，“私は…である”などの行動レベルの自己開示は現れにくく，代わりに，本人の主観的レベルにおいて条件間に差がみられたものと考えられる。また，もう一つの理由として，匿名性のレベルの問題が考えられる。実際のインターネット上では，相手に素性を知られることなく，完全に匿名な状態で相互作用が可能である。それに対して，実験状況における CMC 条件では，相互作用の相手に対しては匿名であるが，実験者に対しては素性を知られており，さらに，会話も監視された状況であ

る。したがって，実験状況における匿名性は限定されたものであり，実際のインターネット上とは匿名性のレベルが異なると考えられる。そして，その結果，自己開示が抑制されたと考えられる。

次に，攻撃的言動に関しては，行動指標および他者評定において，FTFよりもCMCで攻撃的言動が多くみられることが示された。これは従来の知見と同様であり，CMCではFTFに比べて他者に対して反論や攻撃的な発言を行いやすいことを示している。しかし，自己報告では条件間に有意差はみられず，また，平均値は非常に低く床効果を示していた。これは，社会的望ましさの影響が考えられるだろう。すなわち，自分自身が他のメンバーに攻撃を行ったと報告することに抵抗を感じ，その結果，自らの攻撃性を実際よりも低く見積もっていた可能性が考えられる。このことから，自己報告は攻撃的言動の測定には適さないものと考えられる。

自己意識との関連性

本研究では，私的自己意識，公的自己意識尺度の項目数を増やし，尺度の一次元性および信頼性を確認した上で，CMCとFTFにおける私的自己意識と公的自己意識の差異を検討した。その結果，Matheson & Zanna (1988) と同様に，CMCではFTFよりも参加者の私的自己意識が高いことが確認された。CMCは孤立した状況でのコミュニケーションであるため，より自己の内面に注意が向きやすく，内省的かつ内観的な心理状態を促進すると考えられる (Joinson, 2001)。また，CMCにおける文字を介したコミュニケーションでは，自分の考えを一旦整理して言語化する過程を含んでおり，さらに，自分の発言が画面上に消えずに残ってしまう。これらもまた，自己の内面への注意を促進していたと考えられるだろう。一方で，公的自己意識に関しては，Matheson & Zanna (1988) とは異なり条件間に差はみられず，さらに，平均値の方向も予測とは逆であり，CMCにおいてFTFよりも参加者の公的自己意識が高かった。匿名性の観点から考えると，CMCでは公的自己意識が減少すると考えられるが，何故CMCにおける公的自己意識のレベルはFTFと同様であったのか。実験後にインタビューによると，参加者の4割が，“会話中に誤解がないよう言い回しに気をつけていた”と回答していた。Dubrovsky, Kiesler, & Sethna (1991) によると，CMCでは，非言語情報が削除されるため，FTFに比べて感情が伝わりにくく，誤解を増やし，冷たい印象を促進してしまうとされる。本研究では，他者と協力して物語を作成する共同作業場面を用いたため，参加者は相手に誤解や冷たい印象を与えないよう表現や言い回しにより注意を払い，その結果，公的自己意識を高めてしまったと考えられる。したがって，CMCが公的自己意識に及ぼす効果は，相互作用の場面によっても異なる可能性が考えられるだろう。

また，本研究では，従来直接検討されてこなかった脱抑制的行動と自己意識の関連性についても検討を行った。パス解析の結果，私的自己意識による媒介過程がみられ，CMCが参加者の私的自己意識を高め，そして，私的自己意識が高いほど攻撃的言動の数が多いという流れが確認された。すなわち，CMCにおいて私的自己意識が高まった結果，自己の信念や態度に基づいた主張的な発言行動を導いたものと考えられる。一方，Joinson (2001) のモデルとは異なり，自己開示に関しては自己意識による媒介過程はみられなかった。これは，前述の通り，実験中における自己開示の絶対数が少なかったことが原因として考えられ，この点に関しては，今後より自己開示が生起しやすい実験場面を用いて再検討する必要があると考えられる。

今後の課題

本研究の結果，CMCではFTFに比べて脱抑制的行動が多くみられ，参加者の私的自己意識が高いことが示された。しかし，CMCのどのような特徴がそれらの変数に影響を及ぼしているかについては明らかではない。CMCとFTFは，“匿名性”や“コミュニケーションの媒体（声，文字）”など，いくつかの点で大きく異なる。しかしながら，これらの特徴を分離し，それぞれの効果を独立的に検討した研究はほとんどみられない。“匿名性”と“コミュニケーションの媒体”の効果を分離した研究として，白石・遠藤・吉田 (2002) は，CMCにおける集団極化現象を検討する際，CMC条件とFTF条件に加えて，FTF条件の参加者の間に衝立を立てて相手に関する視覚情報を削除した仕切り条件を作成して検討を行った。このように，CMCにおける様々な特徴の効果に焦点を当てることで，CMCが脱抑制的行動や自己意識に及ぼす効果をより詳細な形で検討ができるものと考えられる。

引用文献

安藤明人・曽我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 (1999). 日本版Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性，信頼性の検討 心理学研究，70，384-392.

Bargh, J., McKenna, K.Y.A., & Fitzsimons, G.J.

(2002). Can you see the real me? Activation and expression of the "true self" on the Internet. *Journal of Social Issues*, **58**, 33-48.

Buss, A.H. (1980). *Self-consciousness and social anxiety.* San Francisco: Freeman & Company.

Carver, C.S. (1975). Physical aggression as a function of objective self-awareness and attitudes toward punishment. *Journal of Experimental Social Psychology*, **11**, 510-519.

Coleman, L.H., Paternite, C.E., & Sherman, R.C. (1999). A reexamination of deindividuation in synchronous computer-mediated communication. *Computers in Human Behavior*, **15**, 51-65.

Crowne, D.P., & Marlowe, D. (1960). A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, **24**, 349-354.

Dubrovsky, V.J., Kiesler, S., & Sethna, B.N. (1991). The equalization phenomenon: Status effects in computer-mediated and face-to-face decision-making groups. *Human Computer Interaction*, **6**, 119-146.

Franzoi, S.L., & Davis, M.H. (1985). Adolescents' self-disclosure and loneliness: Private self-consciousness and parental influences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 768-780.

Hiltz, S.R., & Turoff, M. (1978). *The Network Nation: Human Communication via Computer.* Reading, MA: Addison-Wesley.

Joinson, A.N. (2001). Self-disclosure in computer-mediated communication: The role of self-awareness and visual anonymity. *European Journal of Social Psychology*, **31**, 177-192.

Kiesler, S., Zubrow, D., Moses, A., & Geller, V. (1985). Affect in computer-mediated communication: An experiment in synchronous terminal-to-terminal discussion. *Human- Computer Interaction*, **1**, 77-104.

Kogan, N., & Wallach, M.A. (1964). *Risk taking. A study in cognition and personality.* New York: Holt, Rinehart & Winston.

Matheson, K., & Zanna, M.P. (1988). The impact of computer-mediated communication on self-awareness. *Computers in Human Behavior*, **4**, 221-233.

Murray, H.A. (1943). *Thematic Apperception Test: Manual.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

O'Sullivan, P.B., & Flanagin, A.J. (2003). Reconceptualizing 'flaming' and other problematic messages. *New Media & Society*, **5**, 69-94.

白石 崇・遠藤公久・吉田富二雄 (2002). コンピュータネットワーク上における意思決定－集団成極化効果を用いて－ 心理学研究, **73**, 352-357.

Siegel, J., Dubrovsky, V., Kiesler, S., & McGuire, T. (1986). Group processes in computer-mediated communication. *Organizational Behaviour and Human Decision Processes*, **37**, 157-187.

Sproull, L. & Kiesler, S. (1986). Reducing social context cues: Electronic mail in organizational communication. *Management Science*, **32**, 460-487.

菅原健介 (1984). 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.

吉田富二雄・安念保昌・遠藤公久 (1998). コンピューターネットワーク上におけるアイディア生成と感情の交流 平成８・９年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書.

Zimbardo, P.G. (1969). The human choice: Individuation reason and order versus deindividuation impulse and chaos. In W.J. Arnold & D. Levine (Eds.), *Nebraska Symposium on Motivation*, vol.17, Lincoln, NA: University of Nebraska Press. pp.237-307.

（受稿３月21日：受理５月７日）